

清家篤 慶應義塾長著「奴雁(どがん)の視点で」2013 年 1 月 10 日 第 178 回福澤先生誕生記念会年頭の挨拶、慶應義塾 H.P より

1. 着実な学びの場を

- (1) 学生の長い職業人生のために大学がなすべき最良のことは、大学に学ぶ学生の本分である学問をしっかりと、自分の頭で考える力を養えるような学塾とすることです。まずは幅広く学問を学んでもらい、学問の面白さ、そうした学問を確立した過去の碩学たちが、まさに自分の頭で考えたプロセスを体験することが必要です。この点で、慶應では文科系学部の学生には実験を伴う自然科学の授業をしっかりと受講してもらい、一方理科系学部の学生にも社会科学や人文科学を十分に勉強してもらっていますが、これは専門的教育を深めると同時に、文理融合の幅広い学問教養を身に付けてもらうことがきわめて重要だと考えているからです。
- (2) その上で、課題発見、仮説構築、仮説検証、結論導出というプロセスをたどる研究活動を自ら行うことです。上級生になってからの卒業論文や卒業研究の作成はもちろん、1 年生、2 年生から少人数授業でレポートをまとめるアカデミック・スキルのプログラムなどもそのよい機会になっています。体育会などの課外活動も、どんな技や戦術が有効であるか考え、それを練習で試し、最も有効と分かった技や戦術で試合に臨むかといったように、自らの頭で考えるよい機会になっています。いずれにせよ、自分の頭で考える力を養うあらゆる機会を充実させることが重要です。
- (3) また機会の充実という点では学生に異文化と触れる機会を多くもってもらうことも大切です。グローバル化の進展する経済社会において、学生たちは将来、文化的背景を異にする人たちと仕事をし、生活する機会がますます増えるわけで、異文化と触れる機会をできるだけ早く持ち、異文化理解力の必要性を早く認識してもらうことが必要です。大切なのは、文化的背景を異にする学生たちが、机を並べて学び、互いに触発しあうことです。
- (4) そのため慶應では海外からの留学生と国内の塾生が、文字通り共に学ぶプログラムの整備を心がけています。例えば英語で行われる授業でも留学生だけでなく日本人の学生も一緒に学べるよう、また留学生にもしっかりと日本語を学んでもらって日本語での授業にも積極的に参加してもらうようにしています。このような一体性を重視した国際化は、留学生向けの学部や研究科を新設して一気に留学生を増やすといった手法に比べて、手間と時間がかかります。しかし真に意味のある国際化を進めるためには、こうしたやり方が急がば回れでも、最も有効な方法だと考えています。

2. 奴雁

- (1) このように教育は目先の即効性ではなく、長期的な効用を重視して行わなければなりません。それは変化の時代であればあるほどそうであると思います。その時々流行に流されず、学生の長い人生に最善と信じる学塾とするということです。

(2)このことで想起されるのが、連合三田会会長の服部禮次郎さんもお好きな言葉だと書いておられた福澤先生が言われた「学者は国の奴雁なり」という言葉です。明治7年の『民間雑誌』に書かれた文章を少し引用しますと、「群雁野に在て餌を啄むとき、其内に必ず一羽は首を揚げて四方の様子を窺い、不意の難に番をする者あり、之を奴雁と云う。学者も亦斯の如し。天下の人、夢中になりて、時勢と共に変遷する其中に、独り前後を顧み、今世の有様に注意して、以て後日の得失を論ずるものなり」と書いておられます。

(3)すなわち、雁の群れが一心に餌を啄んでいるときに、一羽首を高く揚げて難に備えるものを奴雁という、学者もまた、社会の人々が目先の利益に汲々としているようなときに、ひとり遠くを見据え、現状を冷静に分析し、将来のために何が最も良いかを考える者でなければならないと、おっしゃっておられるわけです。

(4)福澤先生自身がまさにこのような態度を貫かれており、これを福澤の研究家である伊藤正雄氏などは「たとえば、早く封建主義に反対して、国民を文明開化に導きながら、西洋直訳の民権論などが横行する世の中になれば、逆に国権論を唱えて、国民の自覚を促し輕挙を戒め、さらに国権主義の風潮が盛んになって、極端な国粹主義や軍国主義に発展する危険があれば、またその無謀を警告する」と述べています。時流に流されず、しっかりと自分の頭で考えて発言し、行動するという態度です。そしてその基礎となるのが、学問であり、先ほど幼稚舎生たちが「福澤諭吉ここに在り」と元気に歌ってくださったように、人々が立ち騒ぐなかで、一人冷静に学問にいそしみ、学問によって将来の日本の近代化に備えられた福澤先生に、われわれはいつでも立ち返らねばならないと思います。

(5)学問の大切さは、われわれの知っているものや経験は必ずしも真理ではなく、事物の真理は学問を通じてはじめて正しく理解されるということです。コペルニクスやガリレオ・ガリレイの地動説は人々の実体験と正反対だったため、最初は異端の説とされましたが、しかしやがてそれが真理であることを人々は理解し、それがニュートン力学に結びつき、産業革命を可能にして今日の物質的に豊かな社会の基礎となっていることを考えれば、学問による真理探究がいかに大切であるか分かります。大切なのはそうした長期にわたって社会を発展させるような学問、今は役に立たないように思われても将来大きな効用を人類にもたらすような基礎研究を進めることだと思います。大学の学問による社会貢献もこうしたところにあると考えています。

3. 独立自尊

(1)時流に流されず、長期的な視点に立った教育、研究は、その時々々の権力や社会勢力から独立したところでなければ成り立ちません。そしてそうした教育や研究が、実はその社会にとっても不可欠なのです。大学の役割はここにあります。

(2)そのときに大切なのが、私立であるということです。国民や住民の税負担で運営されている国立、公立の大学は、やはりその時々々の国民、住民の平均的な考えに沿わざるを得ないからで、実際最近の「市民目線」による事業仕分けなどによって、大学の事業が仕分けられたりもしています。

(3)しかし私学はそうではありません。固有の建学理念に則り、個性のある教育を、より自由に展開することのできる存在です。もちろん私学といえども公的助成を受けており、また様々なステークホルダーに支えられているわけですから、それらの意見や要望に耳を傾けなければならないのは冒頭に述べたとおりですが、その上で自らの考えをしっかりと持ち、それに基づく教育をすることが私学の責務だと思います。

(4)私たち慶應義塾では、言うまでもなくその建学の理念を示すのが福澤先生であります。何よりも学問を尊び、それによって自分の頭でものを考え判断することのできる独立自尊の人を育てるということであり、こうした義塾の原点を示してくださる先生を創立者に持つことのできる私たちは、まことに幸せであると申せましょう。

[コメント]

2013年1月10日に開催された第178回福澤先生誕生記念会における清家塾長の年頭の挨拶で示した福澤先生の「奴雁」と「独立自尊」のお考えはものごとを考えるときの基本と考える。

— 2013年10月10日林 明夫記 —